

令和2年度 高谷中学校ブロック

第3回義務教育学校の設置に関する検討委員会

令和2年6月27日（土）第1部 13:30～14:30

第2部 14:30～15:30

信篤公民館 第2会議室

第3回検討会の主な内容

- 検討委員会、保護者アンケートからの課題の共通理解
- 二俣小学校の移転について

1 委員長挨拶

2 協議

- (1) 検討委員会、保護者アンケートからの課題の共通理解について
- (2) 二俣小学校の移転について

3 その他

高谷中学校ブロック 第4回義務教育学校の設置に関する検討委員会の予定

○日時：令和2年8月29日（土）13時30分から15時00分

○場所：信篤公民館（予定）

1 前回の検討会で出された課題及びアンケートで出された課題

検討委員会で出された課題

- ・二俣の移転は必要か
- ・分離型では教育効果がないのでは
- ・二俣の周辺環境の改善が必要
- ・通学路が危険
- ・通学路距離が長くなり登下校が困難
- ・一体型校舎を建てる土地があるのか
- ・既存の校舎を活かせないか
- ・跡地利用はどうするのか
- ・学童保育はどうなるのか
- ・教師の多忙化が増すのではないか
- ・人数の減少に対する対策
- ・学区の見直し
- ・高谷地区の都市計画や新しい道路との関係
- ・義務教育学校の詳細を知りたい

アンケートで出された課題

- ・通学路が危険
- ・通学距離が伸びることで登下校ができない
- ・通学距離が伸びることへの対策が必要
- ・分離型では一貫教育の効果がないのでは
- ・学区の見直しが必要
- ・教師の多忙化が増す
- ・児童生徒への影響が心配
- ・特別支援学級等はどうするのか
- ・人間関係の固定化が心配
- ・人数が多くなることで目が行き届かない
- ・少人数での良さがなくなる
- ・義務教育学校の詳しい情報が欲しい

○二俣小学校の移転に伴う課題

- ・移転の必要性
- ・通学の安全性
- ・学区、指定校変更制度
- ・小規模の良さ

○義務教育学校の設置に伴う課題

- ・通学路の距離や安全
- ・通学区域の扱い
- ・9年間の継続性
- ・一体型校舎の設置場所

○施設分離型による小中一貫教育

- の取組みに伴う課題
- ・移転後の校舎利用
- ・学校運営、教職員の負担、教育活動
- ・学校以外（学童保育、施設開放投）

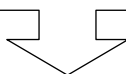
○小中一貫教育の周知

- ・内容の詳細
- ・塩浜学園の詳細
- ・他の事例

2 小中一貫教育の考え方

(1) 小中一貫教育の必要性

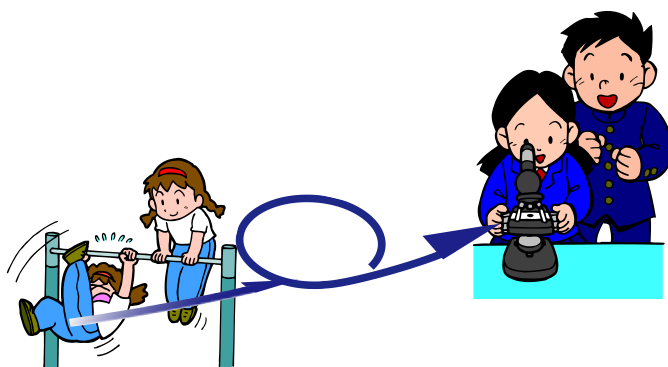
- 未来へ向かって成長し、未来を担う子どもに、これからの社会をよりよく生きていく力を育むことは、とても重要なことです。
- 教育基本法及び学校教育法は、義務教育9年間で児童生徒を育成するという考え方に立っており、小・中学校間で分断することなく、同じ方針・方向性に沿って、生きる力をじっくりと育てることが大切です。
- このため、義務教育9年間で形成する小学校と中学校が互いに協力し、責任を共有して児童生徒に必要な資質・能力の育成を図ることが必要です。



小中一貫教育の導入

- 小中一貫教育は、小・中学校が目指す子供像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、体系的な教育を目指す教育です。
- 小・中学校の段階間には学級担任制と教科担任制といった授業形態や、指導方法、評価方法、生徒指導の手法などに違いがあると言われています。小中一貫教育は、それらを統一したり、どちらかへ合わせたりすることではなく、指導内容や方向性に一貫性を持たせること、そして、発達段階に応じて、9年間の指導を系統的且つ段階的に行うようにすることを目指しています。

- 小中一貫教育は、小学校と中学校が別のものという意識を越えて、義務教育9年間で子供を育てる取組につなげます。
- 小中一貫教育は、小・中学校の教職員が子供のために力を合わせ、助け合い、子どものより良い成長を目指す取組につなげます。
- 小中一貫教育は、単に小・中学校の接続の強化ではなく、9年間の学習指導や生徒指導を、一貫性のある取組につなげます。



(2) 学習指導について

- 小中一貫教育では、小・中学校の教育課程の構造的な理解を踏まえて一貫性のある学習指導が進められます。小・中学校の教育課程や授業内容の連続性を理解し、一貫性のある授業を行うことが「分かる授業」につながり、学力の向上が図られます。

○子どもたちは、小学校1年生から中学校3年生までの義務教育9年間の中で、日々の学習を積み上げて成長していきます。

○児童生徒のつまづきやすい学習内容については、長期的な視点に立って、学習指導の工夫に取り組むことが重要です。

○小学校6年生から中学校1年生の指導内容への橋渡しを円滑にすることだけでなく、中学1年生の教科担任が、「つまづきの原因は、小学校2年生の内容の習熟にある」と言ったことが分かるようになることが、「分かる授業」へとつながります。



○小学校の教員

- ・今の学習は、中学校へどのようにつながっていくのかな？
- ・この学習が身につけていないと、中学校のどの学習が困難になるのかな？

○中学校の教員

- ・この学習の基礎知識は、小学校のどの単元で学んできたのかな？
- ・小学校のどの学年で何を学んで、何につまづいて今の子供の姿があるのかな？



○ 現状は…

- ・小学校では、就学前教育や下学年の積み重ねを、どのような学習につなげていくかということについては、十分に意識をしていますが、その学力をどのように中学校につなげていくかということについては、あまり意識されていません。
- ・中学校では、今の学習が義務教育の出口である進路選択にどうつながっていくのかということについては、十分に意識をしていますが、小学校のこういった積み重ねの上に、この学習があるのかということについては、あまり意識されていません。

○ 学習指導の事例（小学校高学年の教科担任制）

○小学6年生の授業を初めて担当した中学校の教員は…

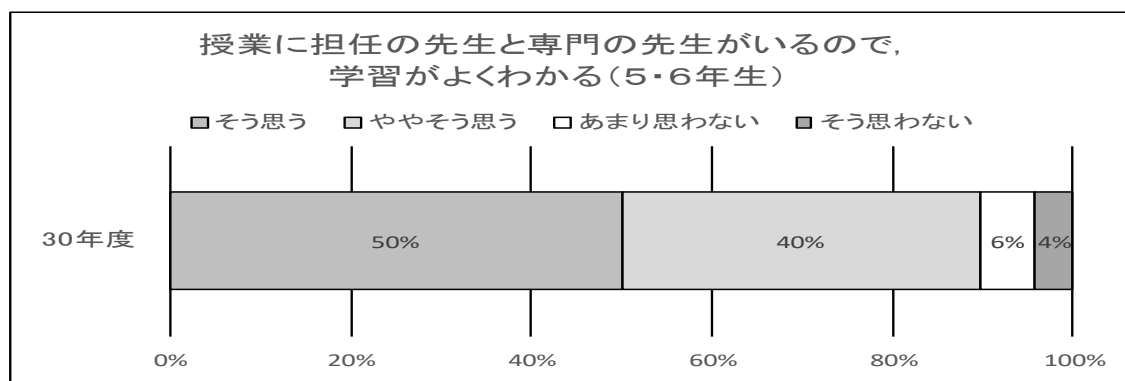
- ・小学校でどこまで学習してきているのか、どのように学習を進めているのかが良く分かりました。
- ・翌年、中学校1年生の授業を担当した時には、学習する内容が小学校のどの学習から繋がってきているのかが良く分かっていたので、授業の中で「その考え方は、去年の6年生の授業でも出てきたよね。思い出してごらん」と話すことが出来、子供たちは、その学習の振り返りによって、学習のつながりが良く分かり、理解も深まったように思います。また、実際の授業では、誰がどこで躓いていたのかがよく分かっていたので、ティーム・ティーチングによる個別指導も効率よく進められました。去年6年生の授業を受け持っていなかったら、こんなことは分からなかったと思います。



○小学校の学級担任は…

- ・ティーム・ティーチングによって、重点的に個別指導をすることができました。また、中学校の先生からは、指導法についても学ぶところが多くありました。

○子供たちは…



【塩浜学園調査】

(3) 生徒指導について

○ 生徒指導の事例



○採用以来ずっと中学校に勤めてきた教員は…

- ・今まで中学校に入学してきた新生生には、中学校の学習や生活形態に合わせるために、一度リセットをして新たな指導をしてきました。しかし、初めて小学校の授業をチーム・ティーチングで担当したり、小学校の教員と意見交換をしたりしていると、小学校では本当に丁寧な指導がされてきていることが分かりました。だから中学校でも、その丁寧さを引き継いでいった方が、効果的だと思います。

○小学校における生徒指導機能の強化

- ・小学校に、家を出たまま学校に来なかったり、家出をしてしまったりする児童がいました。これまで小学校の学級担任が指導に当たってきましたが、中学校の生徒指導主任を中心に、学校全体で対応する体制をとりました。
- ・家を出たまま学校に来ていない時には、生徒指導主任の他、中学校の教員が空き時間を使って探しに出てくれました。小学校の学級担任には空き時間がなく、いままで苦慮していた対応が可能になりました。
- ・この児童については、週1回の定例会議で小中の教員が情報を共有し、カウンセラーや養護教諭等の専門職も含めて、様々な視点から対応策が話し合われました。その結果、中学校に配置されているカウンセラーの積極的な教育相談も進められました。
- ・その児童が中学校に進学しても、これまでの対応方針が引き継がれ、児童や保護者の安心感につながり、改善が図られていきました。



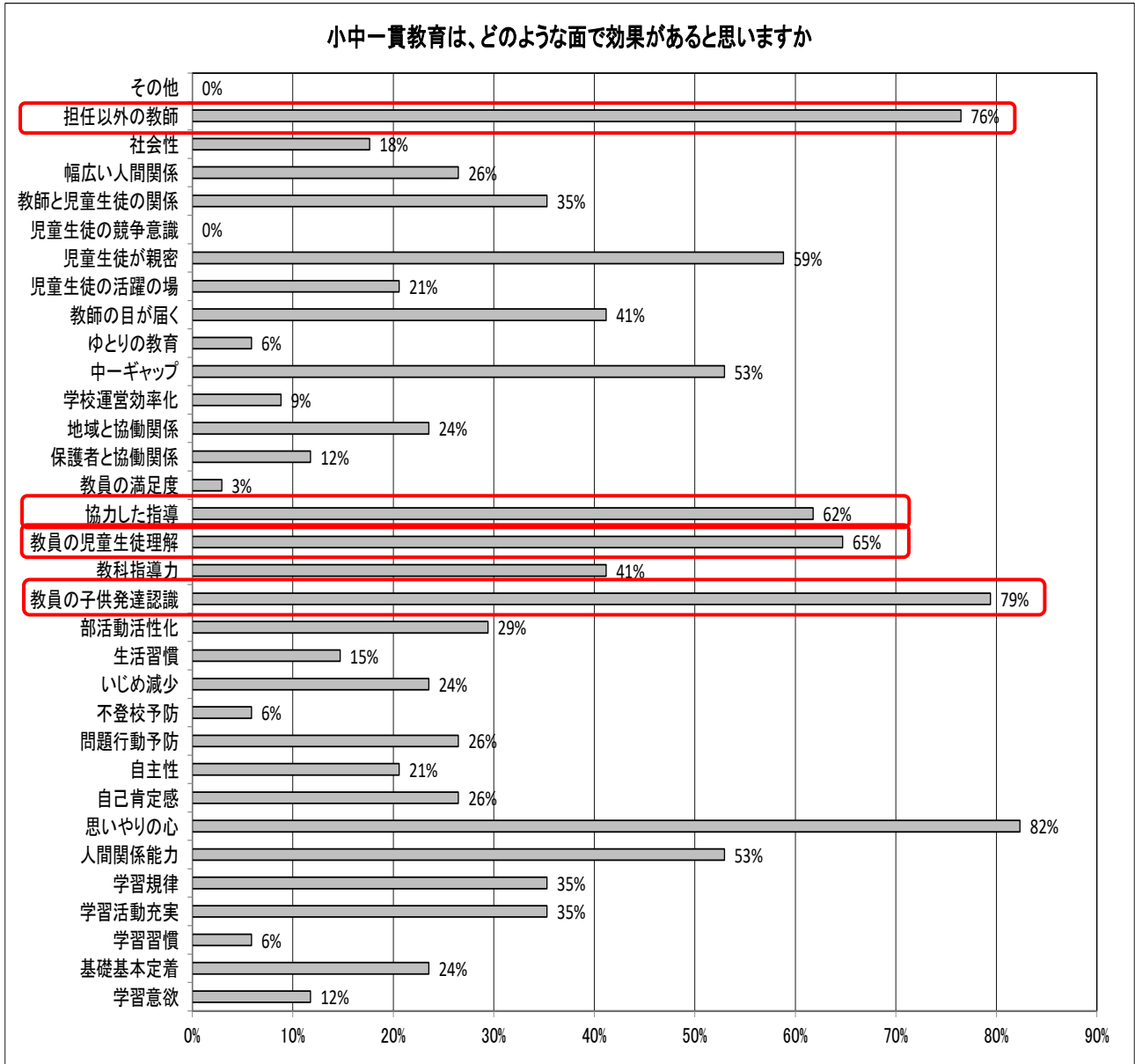
○中学生への小学校教員の関り

- ・小学校のころから不登校傾向にあった児童が、中学校に進学後しばらくして不登校になってしまいました。しかし中学校の教員は、生徒との関りの期間が短く、十分な信頼関係が築けないでいました。そこで、小学校時の担任が生徒や保護者との面談を重ね、その情報を中学校の教員と共有することによって、中学校の教員は生徒や保護者の思いを理解し、対応の方針を共通理解することが出来ました。中学校の教員と小学校の元担任が協力することによって、その生徒の不登校は改善されていきました。



(4) 教職員の意識 (平成 25, 28 年度, 令和元年度 塩浜学園調査)

- 小中一貫教育の取組によって、多くの教職員が指導上の効果を感じています。
- 中学校区は、児童生徒が育つ場だけでなく、教員が授業力を磨き、専門性を高められる場になります。



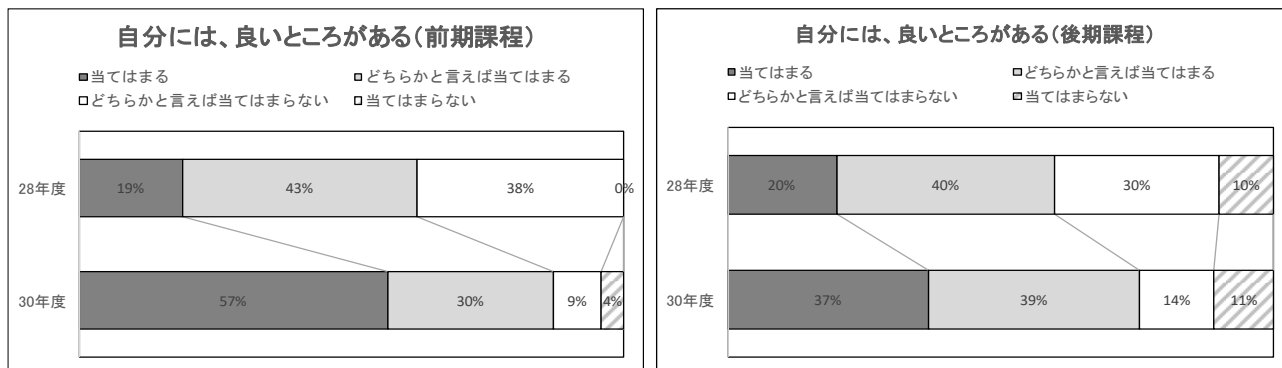
- ・子どもの発達に対する教員の認識が深まる。(79%)
- ・担任以外の教師に教えてもらえる機会が増える。(76%)
- ・教員の児童生徒理解の深化につながる。(65%)
- ・協力して指導に当たる意識の向上につながる。(62%)

○ 自由記述

- ・9年間の系統性、連続性のある学びを推進していくことが大事。
- ・学習について、9年間の見通しを持てることは有意義である。
- ・異校種交流が出来て教員同士では得るものが大きい。

○ 自己肯定感の高まりも…

- ・塩浜学園では、前期課程児童及び後期課程生徒共に、「自分には良いところがある」という質問に対して肯定的に答える割合が伸びています。



○このことは、児童生徒・保護者の意識調査から、幅広い年齢による交流活動が要因のひとつと考えられますが、その背景には、子どもの発達に対する教職員の認識が深まり、個々の児童生徒理解の深化によって、指導の充実が図られていることが、大きく影響していると考えられます。

○ 現状は…

○小学校、中学校両方の校長経験者の話

- ・中学1年生の担任は、「小学校は何を教えてきたのか、どういうしつけをしてきたのか」という話をよくします。
- ・小学校時の担任は、卒業生が少し違った雰囲気では会いに来た時に「中学校の先生はこの子たちのことを分かっていない、理解しないから悪くなった」という話をします。

- ・小学生は中学生になり、小学生の保護者は中学生の保護者になり、そして、地域は小学校と中学校の双方を見ており、子供の育ちは学校単位で完結するものではありません。このため、小学校、中学校という枠の中ではなく、義務教育9年間で学びと育ちを見ることが大切ですが、これまで小学校と中学校の間には、他責文化（相手の責任と考える文化）、または互いに干渉しない文化が多量に存在してきました。

小中一貫教育を導入して…

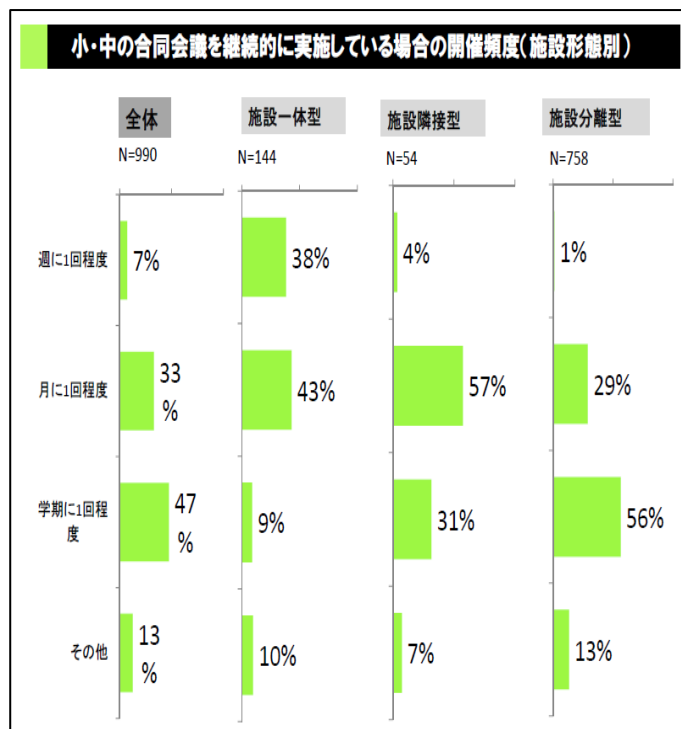
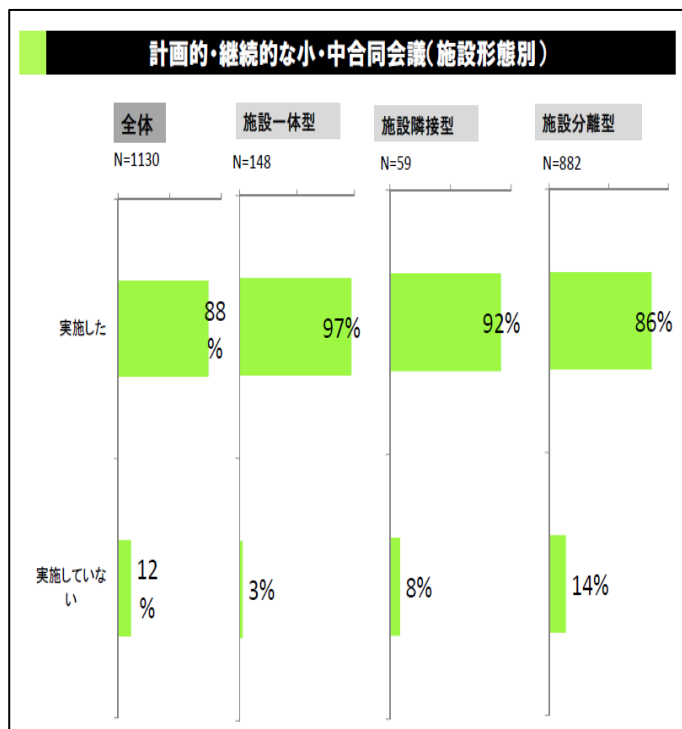
- 小学校と中学校が別のものという意識を越えて、義務教育9年間で子供を育てる取組につなげることが大切です。
- 小・中学校の教職員が子供のために力を合わせ、助け合い、子どものより良い成長を目指す取組につなげることが大切です。
- 小・中学校の接続の強化だけではなく、9年間の学習指導や生徒指導を、一貫性のある取組につなげることが大切です。

3 小中一貫教育等についての実態調査

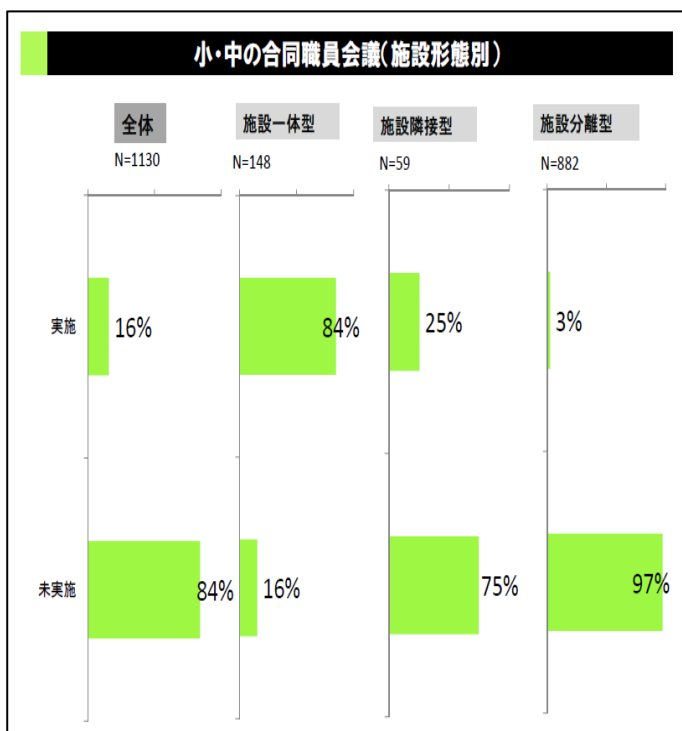
小中一貫教育等についての実態調査の結果（1130校）（平成27年度 文部科学省）

小中一貫教育を通して指導上の効果を高めるためには、施設一体型の教育環境が求められます。

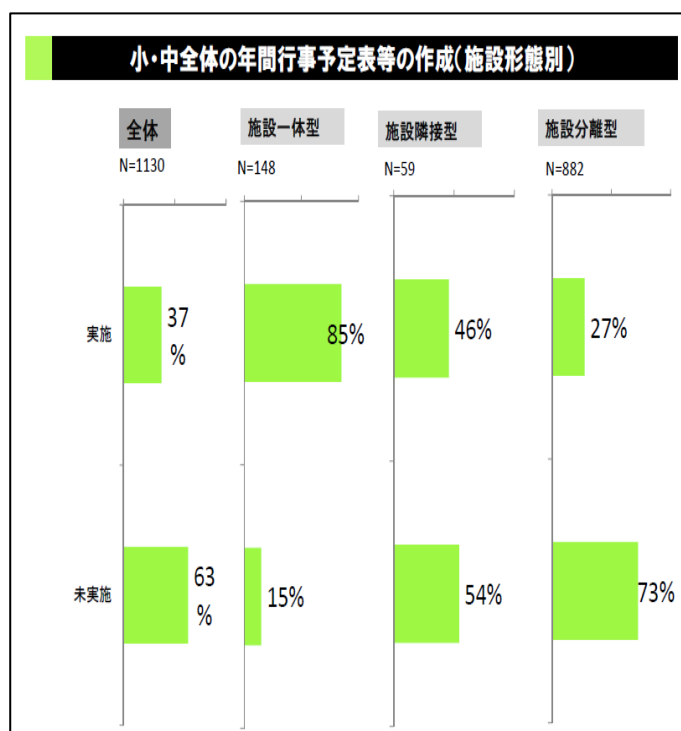
○小・中合同会議



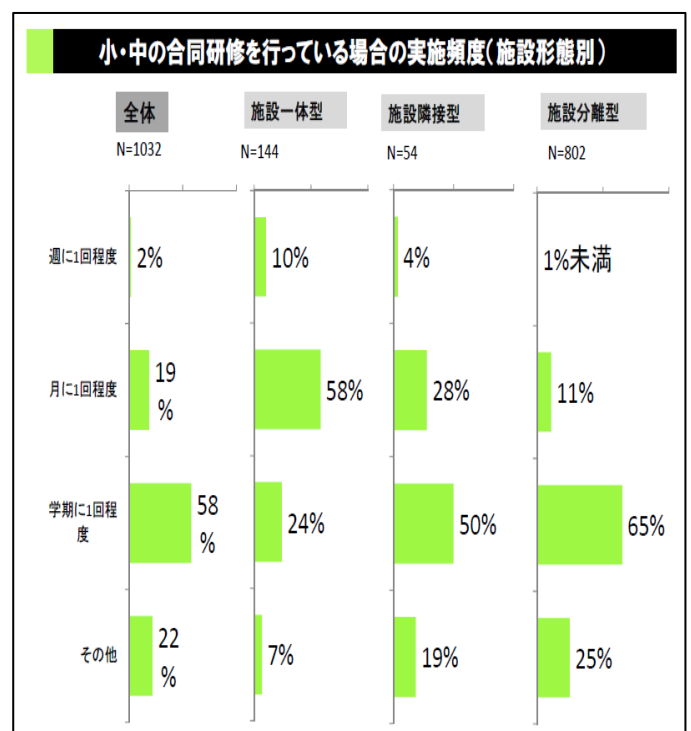
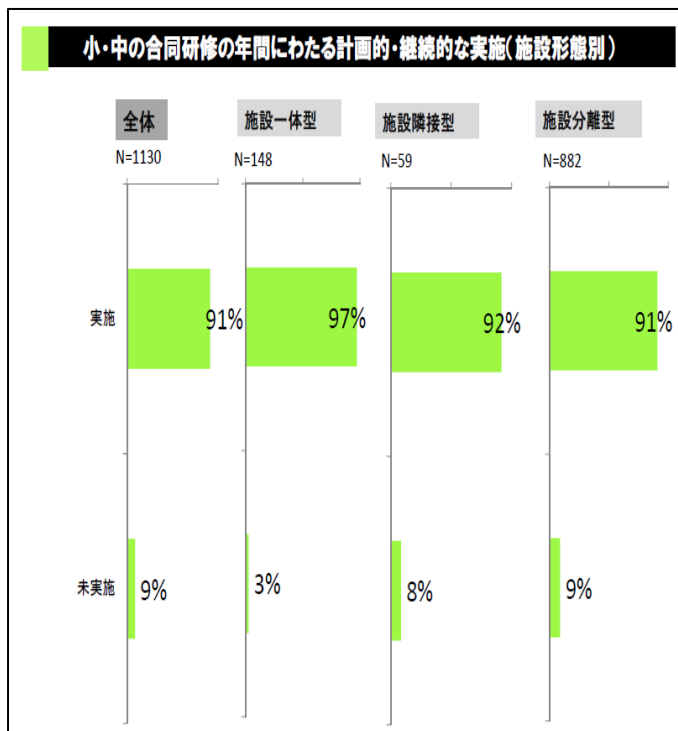
○小・中合同職員会議



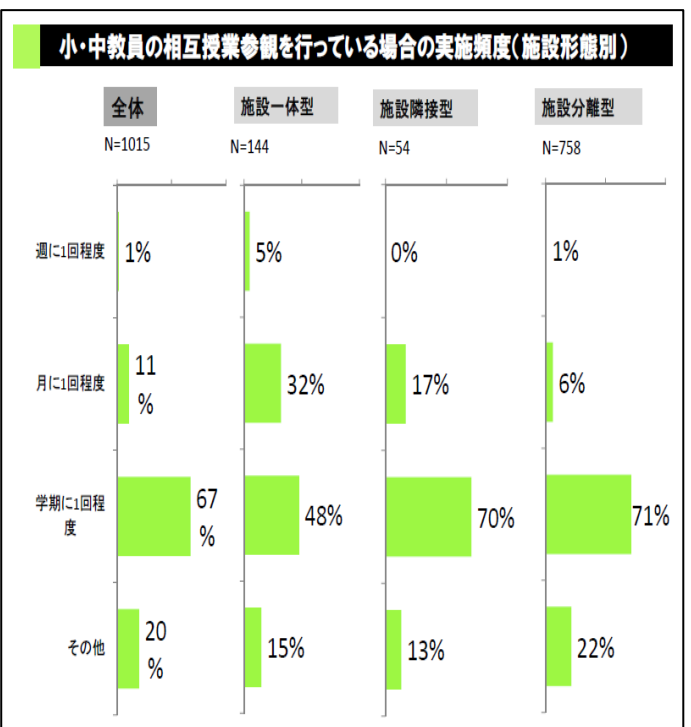
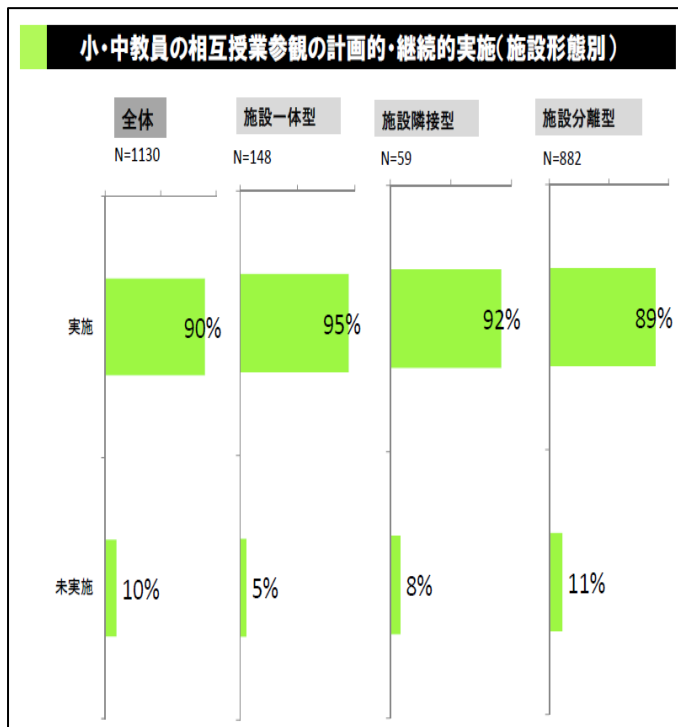
○小・中全体の年間行事予定表作成



○小中合同の研修会



○小・中教員の相互授業参観



二俣小学校を高谷中学校へ移転させることをご提案いたします

4 二俣小学校の課題

(1) 立地の課題について

○街づくりの方向性

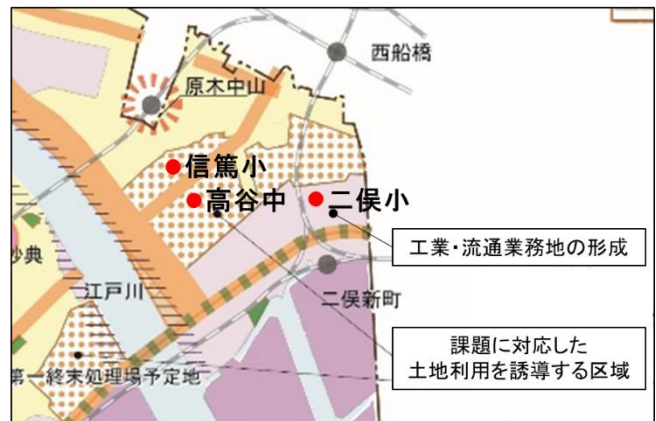
都市計画マスタープラン（※）において、二俣小学校の立地は『工業・流通業務地の形成』という方針があります。

一方、信篤小学校、高谷中学校の立地は『課題に対応した土地利用を誘導する区域』という方針があります。

土地利用の主な方針と方針図



拡大図



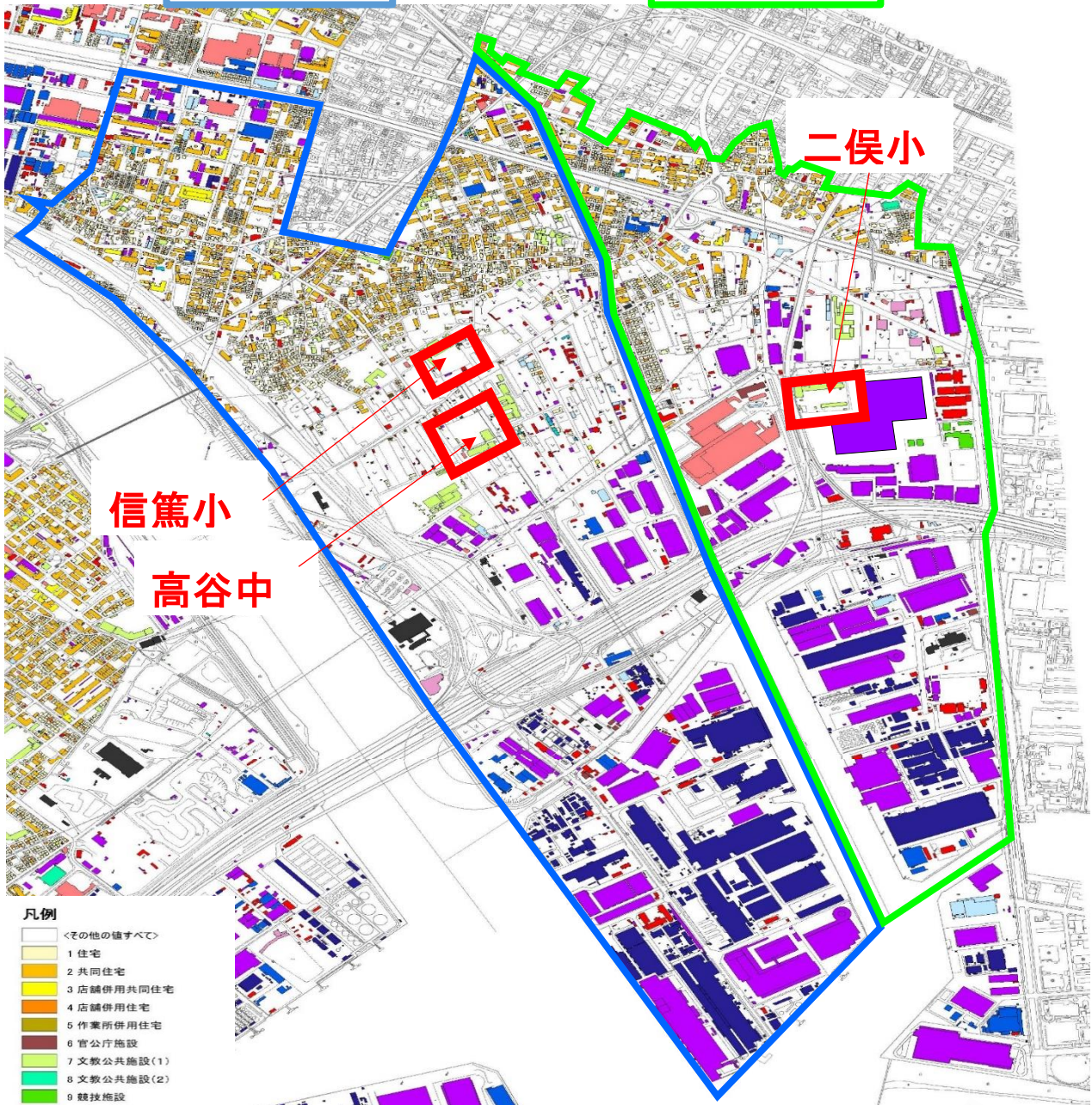
※都市マスタープランとは

都市計画法（18条の2）に定められている「市町村の都市計画に関する基本的な方針」の呼称であり、市町村がその創意工夫のもとに、市民の意見を反映して、都市の将来あるべき姿や都市づくりの方向を定めるものです。

○二俣小学校学区立地と住居について（図1）

信篤学区

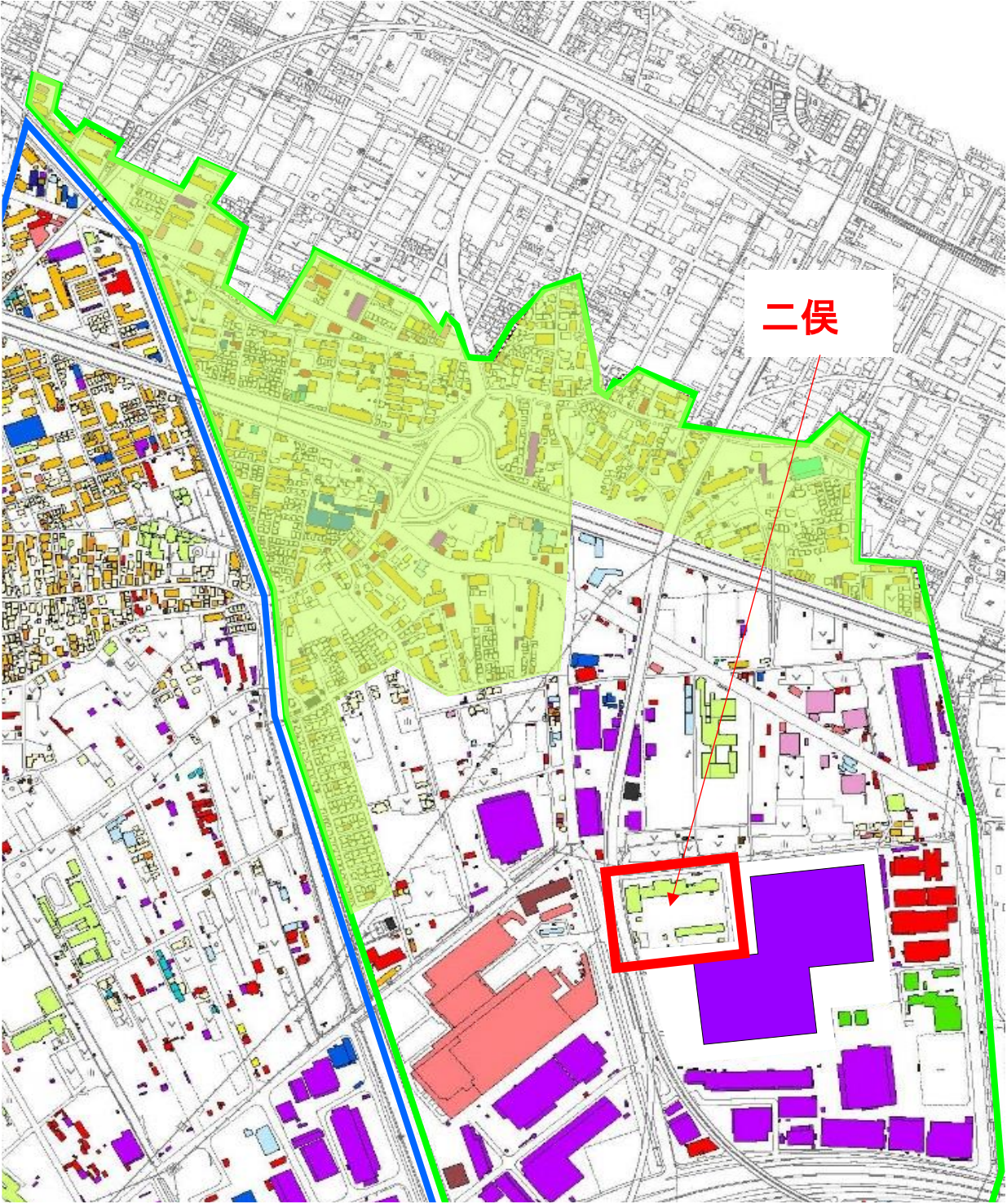
二俣学区



凡例

- <その他の種すべて>
- 1 住宅
- 2 共同住宅
- 3 店舗併用共同住宅
- 4 店舗併用住宅
- 5 作業所併用住宅
- 6 官公庁施設
- 7 文教公共施設(1)
- 8 文教公共施設(2)
- 9 競技施設
- 10 業務施設
- 11 商業施設(物販店・飲食店)
- 12 宿泊施設
- 13 遊技施設
- 14 娯楽施設
- 15 運輸・倉庫施設
- 16 重化学工業施設
- 17 軽工業施設
- 18 サービス工業施設
- 19 家内工業施設
- 20 農漁業用施設
- 21 その他施設

○二俣小学校区の住宅エリア（図2）



※網かけ部分が住宅

令和2年度（5月1日現在）の二俣小学校に通う住所別人数は、

- ・二俣2丁目 …49人
- ・二俣1丁目 …54人
- ・原木3丁目 …104人
- ・原木4丁目 …9人
- ・原木1丁目 …1人
- ・二俣713番地…1人
- ・田尻1丁目 …1人
- ・田尻3丁目 …1人
- ・高谷2丁目 …1人
- ・稲荷木1丁目 …1人
- ・稲荷木3丁目 …1人

となっており、京葉道路の付近から多く通っていることがわかる。

また、二俣小学校学区及び立地（図1）と住居地区とそれ以外の施設（図2）を見ると、二俣小学校より北側の「京葉道路沿い」と「川沿い」に住宅があり、二俣小学校より南には「倉庫」や「工業施設」が多くあることがわかる。

(2) 小規模化の課題について

①高谷中学校ブロックの指定校変更の現状

ア 児童生徒数・学級数推計

学校名	入学者割合		R2	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12
信篤小	90.40%	児童数	728	731	729	762	786	813	837	827	808	782	769
		学級数	23	23	22	24	25	27	27	25	24	24	24
二俣小	67.50%	児童数	222	222	212	209	217	233	226	210	205	201	190
		学級数	9	9	8	8	9	10	9	8	7	7	7
高谷中	68.40%	児童数	443	438	406	400	388	356	356	371	393	394	379
		学級数	13	13	13	12	12	12	12	12	12	12	12

※入学者割合は平成30年度から令和2年度の平均

※令和2年度は実績（5月1日現在）

※学級数は通常学級数

イ 令和2年度 学校別指定校変更した人数及び理由

学校名	入学率	指定校変更した学校名	人数	理由
高谷中学校	68.4%	第六中学校	50人	・学校が近い 30人 ・兄弟姉妹の関係 6人 ・友人関係 14人
		私立	20人	
信篤小学校	90.4%	鬼高小学校	14人	・学校が近い 5人 ・兄弟姉妹の関係 6人 ・友人関係 2人 ・通学路の問題 1人
		私立	1人	
二俣小学校	67.5%	信篤小学校	17人	・学校が近い 6人 ・友人関係 5人 ・兄弟姉妹の関係 2人 ・通学路の問題 1人 ・その他 2人
		鬼高小学校	2人	・兄弟姉妹の関係 2人

自分の学区から指定校変更をした理由として一番多い理由は「学校が近い」であり、ついで「兄弟姉妹の関係」と「友人関係」であることがわかる。

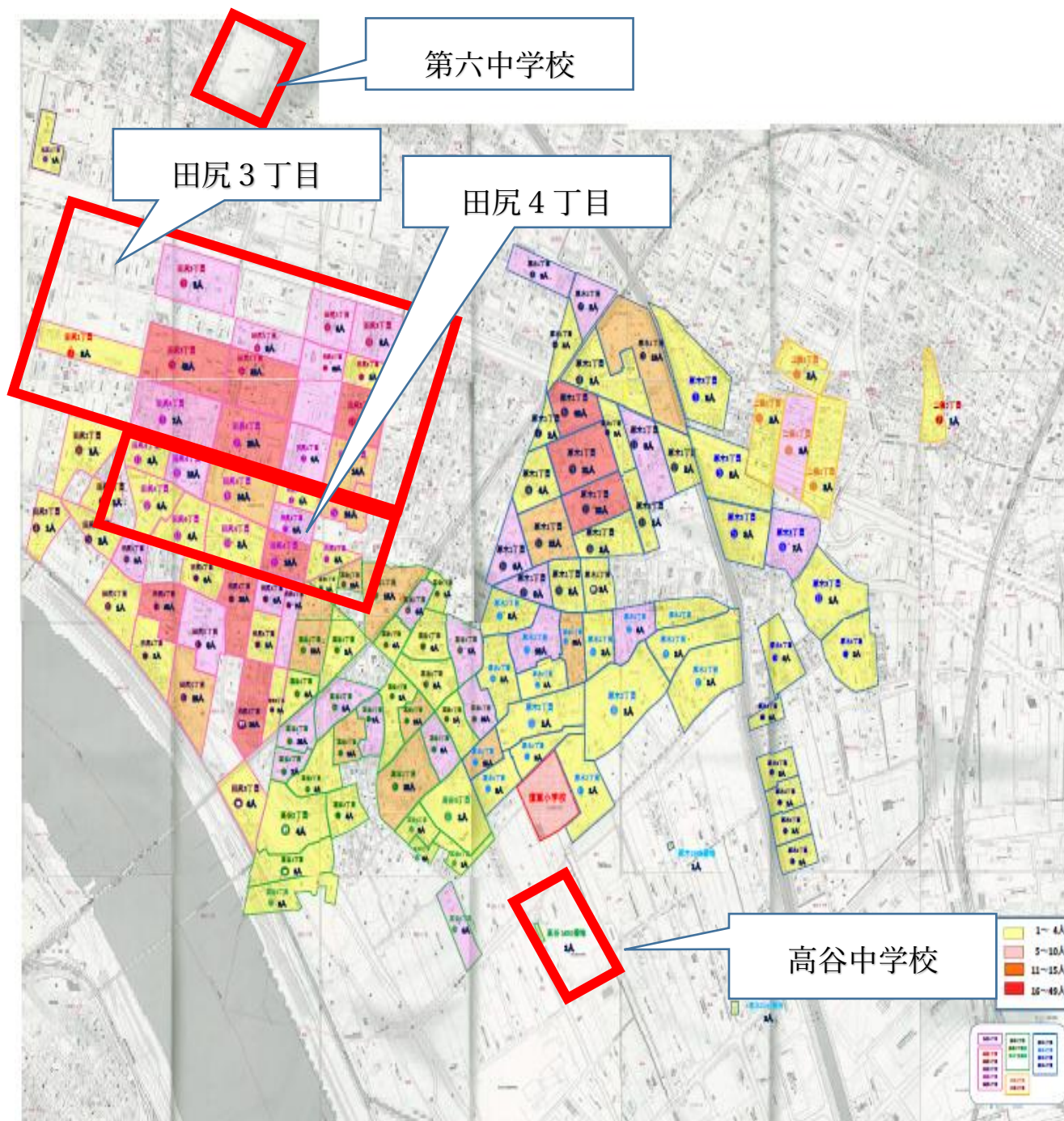
保護者が「学校の近さ」を理由に挙げていることが多いことから、通学路の安全や通学距離、通学時間が重要だと考えていることがわかる。

ウ 高谷中学校区から第六中学校区へ指定校変更した人数と住所

年度	人数	住所（人数の多い住所）			
令和 2年度	50人	田尻3丁目	26人	原木1丁目	5人
		田尻4丁目	12人	（その他	7人）
令和 元年度	27人	田尻3丁目	18人	原木1丁目	3人
		田尻4丁目	6人		
平成30年度	40人	田尻3丁目	22人	田尻5丁目	7人
		田尻4丁目	6人	（その他	5人）
平成29年度	31人	田尻3丁目	21人	原木1丁目	4人
		田尻4丁目	3人	（その他	1人）
平成28年度	46人	田尻3丁目	21人	原木1丁目	8人
		田尻4丁目	7人	（その他	10人）
平成27年度	29人	田尻3丁目	15人	原木1丁目	2人
		田尻5丁目	4人	（その他	6人）
		田尻4丁目	2人		

高谷中学校から第六中学校へ指定校変更した家庭のほとんどが、田尻3丁目と田尻4丁目であることがわかった。図3より、第六中学校の方が高谷中学校よりも近いことがわかる。

○高谷中学校区から第六中学校区へ指定校変更した人の住居エリア（図3）

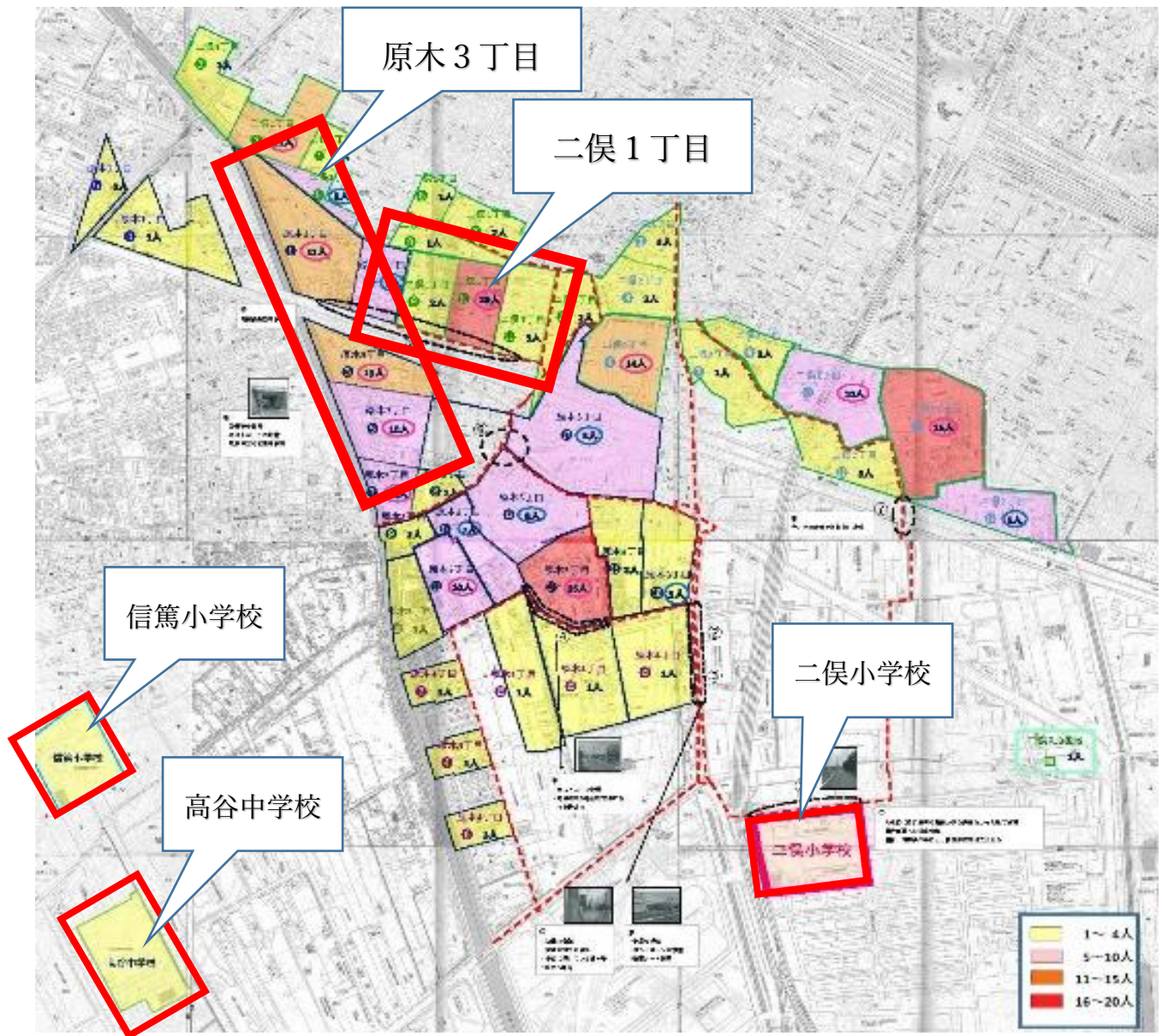


エ 二俣小学校区から信篤小学校区へ指定校変更した人数と住所

年度	人数	住所	
令和 2年度	17人	原木3丁目 8人 二俣1丁目 7人	原木4丁目 2人
令和 元年度	7人	原木3丁目 4人 原木4丁目 1人	二俣1丁目 2人
平成30年度	10人	原木3丁目 7人 二俣1丁目 2人	原木4丁目 1人
平成29年度	0人	信篤小学区への指定校変更制限緩和	
平成28年度	1人	原木4丁目 1人	※自衛隊官舎の撤去 (H29.3)
平成27年度	1人	原木3丁目 1人	※自衛隊官舎からの退所 (H27.9.30)
平成26年度	0人		
平成25年度	3人	原木4丁目 2人 原木3丁目 1人	
平成24年度	2人	原木3丁目 1人 原木1丁目 1人	※自衛隊官舎 廃止決定
平成23年度	1人	原木3丁目 1人	

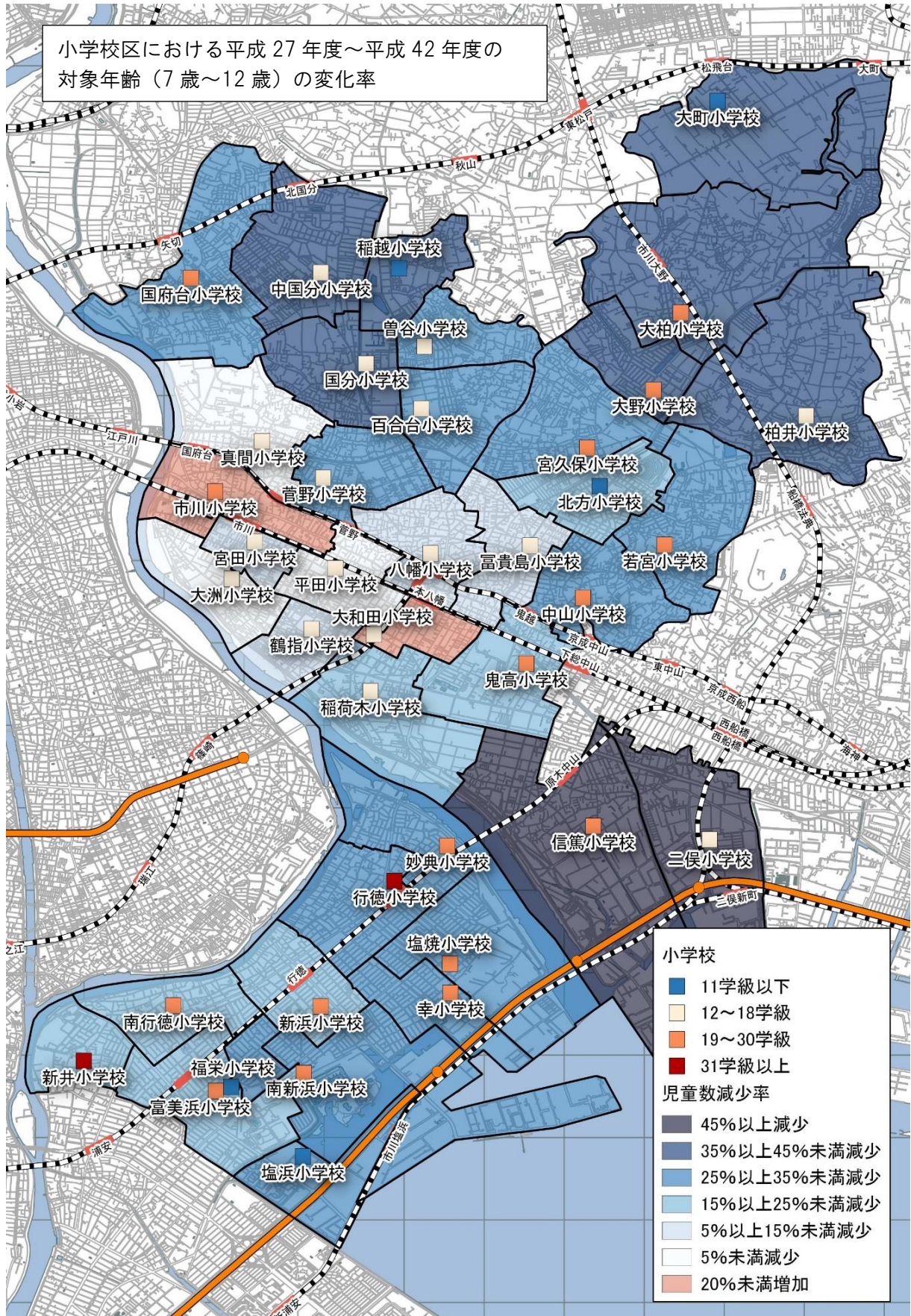
平成29年度までは、信篤小学校の児童数が多かったため、信篤小学校への指定変更に制限がかけられていたが、信篤小学校の児童数の減少により、平成30年度より指定校変更の制限が解除されたことで、指定校変更をする人数が増え始めた。(図4)

○二俣小学校区から信篤小学校区へ指定校変更した人数と住所（図4）

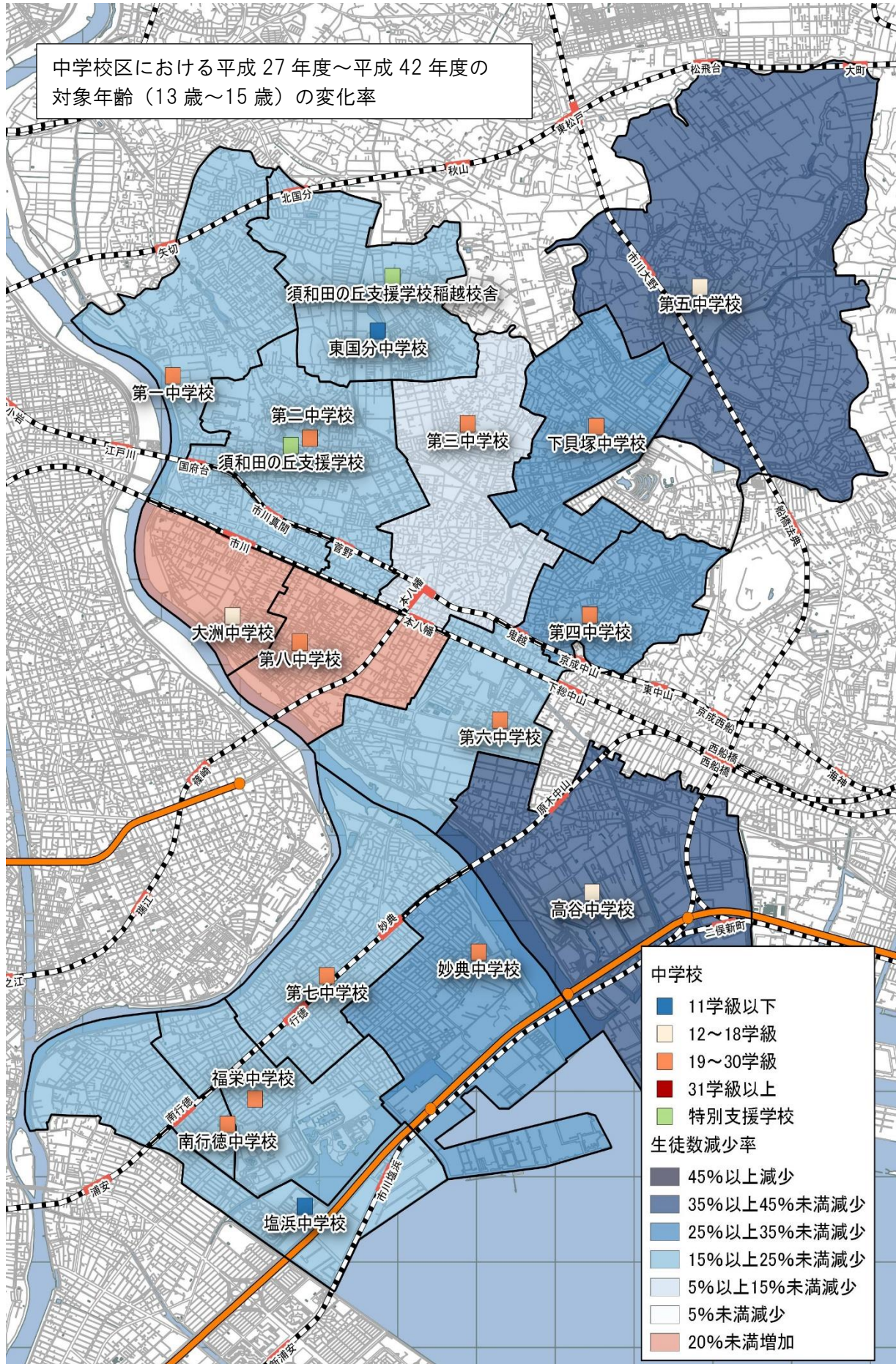


オ 小学校区及び中学校区の対象年齢の変化率

(平成28年3月 市川市公共施設等総合管理計画より)

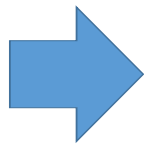


中学校区における平成 27 年度～平成 42 年度の
対象年齢（13 歳～15 歳）の変化率



カ 二俣小学校のあざ別児童推計（令和2年と令和12年との比較）

二俣小へ通っている児童の住所（令和2年5月1日現在）					令和12年度			
あざ	丁目	番地	人数	丁目合計	人数			
稲荷木	1丁目	26	1	1	0			
	3丁目	16	1	1	0			
原木	1丁目	5	1	1	0			
	3丁目	1	10	104	70			
		2	8					
		3	13					
		5	6					
		6	2					
		7	10					
		8	1					
		9	2					
		10	3					
		11	11					
		12	5					
		13	12					
		14	10					
		15	4					
	16	4						
	17	3						
	4丁目	2	3	9	6			
		3	1					
		4	1					
6		3						
12		1						
高谷	2丁目	1	1	1	0			
田尻	3丁目	11	1	1	0			
二俣	1丁目	2	1	49	34			
		3	11					
		4	1					
		5	8					
		6	2					
		7	1					
		9	3					
		10	17					
		11	2					
		12	3					
		2丁目	1			2	54	38
			3			2		
	4		12					
	5		1					
	8		1					
	11		11					
	12		2					
	13	8						
	14	15						
二俣		713	1	1	1			
				222	149			



令和2年度の
人数の約7割

令和2年度の児童数と令和12年度の推計児童数を比べると、222人から149人に減り、令和2年度の児童数の約7割となると推計上は出ている。また、あざ別でみると、原木3丁目と二俣1丁目と二俣2丁目とが16人減っている。

5 学校規模による課題について

学校規模別の実態調査の結果（平成27年度 市川市）

（1）小学校

- 規模によって差異が認められる項目について、課題があると考えられる学校規模の範囲を朱色で示しています。

小学校	学校規模(学級数)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
市川市の現状 1 教育的な視点	(2)豊かな心②自尊意識 自尊意識	学級数が少ないほど低い										学級数が多いほど高い																				
	(2)豊かな心③規範意識 いじめの認知件数	学級数が少ないほど多い										学級数が多いほど少ない																				
	(2)豊かな心④学校生活 不登校の出現率																				増え始める											
市川市の現状 2 運営的な視点	(1)学習指導④教材活用 パソコン教材の活用	学級数が少ないほど多い										学級数が多いほど少ない																				
	(1)学習指導⑤地域人材の活用 地域人材の活用(授業補助)																				少なくなる											
	(2)生徒指導②児童生徒の把握 子どもと向き合う時間(職員の意識)	学級数が少ないほど多い										学級数が多いほど少ない																				
	(3)職員体制②研修会等への対応 職員の研修会参加	学級数が少ないほど低い										学級数が多いほど高い																				
	(3)職員体制②行事等への対応 職員数に対する職員の印象	「今よりも多い方が良い」80%										「今より少ない方が良い」割合が多くなる																				
	(3)職員体制③教職員の配置状況 1学級あたりの教職員数	学級数が少ないほど多い(1.5人以上)										学級数が多いほど少ない(1.5人以下)																				
	(3)職員体制③教職員の配置状況 1学年あたりの担任外教職員数	学級数が少ないほど少ない(0.5人以上1.5人未満)										学級数が多いほど多い(1人以上3人以下)																				
	(4)保護者への対応①学校環境 保護者のPTA活動への参加	学級数が少ないほど高い										学級数が多いほど低い										より少なくなる										
	(4)保護者への対応①学校環境 保護者が学校行事に参加したり相談したりするときの印象	50%以上		「今より多い方が良い」30%以上																		「今より少ない方が良い」約25%以上						50%以上				
	(5)適正規模の印象⑤保護者の印象 子どもが学校行事や学年活動を行う時の印象	「今より多い方が良い」40%以上				30%以上				適正規模								「今より少ない方が良い」25%以上				50%										
(5)適正規模の印象⑤教職員の印象 子どもが学校行事や学年活動を行う時の印象	「今より多い方が良い」20%以上 課題のある規模																				「今より少ない方が良い」60%以上 課題のある規模				「今より少ない方が良い」80%以上 課題のある規模							
市川市の現状 3 運財政的な視点	児童一人当たりの配当額	最多学校規模の2倍以上										学級数が少ないほど少ない(学級数の増加に伴う減少幅は少ない)																				
	1学級あたりの配当額	最多学校規模の2倍以上										学級数が少ないほど少ない(学級数の増加に伴う減少幅は少ない)																				

(2) 中学校

中学校	学校規模(学級数)	1~5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
市川市の現状 1 教育的な視点	(3) 健やかな体①運動への関わり 休み時間に外へ出て遊ぶ																							少なくなる
市川市の現状 2 運営的な視点	(2) 生徒指導②児童生徒の把握 「先生は気軽に相談に乗ってくれる」と 感じる児童生徒	学級数が少ないほど低い										学級数が多いほど高い												
	(2) 生徒指導②児童生徒の把握 子どもと向き合う時間(職員の意識)	学級数が少ないほど多い					学級数が多いほど少ない					より少なくなる												
	(2) 生徒指導③交流活動 異学年交流活動	学級数が少ないほど少ない										学級数が多いほど多い												
	(3) 職員体制③教職員の配置状況 1学級あたりの教職員数	学級数が少ないほど多い(2人以上)										学級数が多いほど少ない(2人以下)												
	(3) 職員体制③教職員の配置状況 1学年あたりの担任外教職員数	学級数が少ないほど少ない(5人以下)										学級数が多いほど多い(5人以上7人以下)												
	(4) 保護者への対応①学校環境 学校が相談しやすい環境であると考え る保護者	より高くなる					学級数が少ないほど高い										学級数が多いほど低い							
	(4) 保護者への対応①学校環境 保護者が学校行事に参加したり相談し たりするときの印象	65%	「今より多い方が良い」			50%											「今より少ない方が良い」30%			50%以上				
(5) 適正規模の印象⑤保護者の印象 子どもが学校行事や学年活動を行う 時の印象	85%	「今より多い方が良い」			45%	適正規模										「今より少ない方が良い」20%以上			50%以上					
(5) 適正規模の印象⑤教職員の印象 子どもが学校行事や学年活動を行う 時の印象	「今より多い方が良い」40%以上 課題のある規模															50%以上 課題のある規模			「今より少ない方が良い」70%以上 課題のある規模					
市川市の現状 3 運財政的な視点	児童一人当たりの配当額	最多学校規模の2倍以上					学級数が少ないほど少ない(学級数の増加に伴う減少幅は少ない)																	
	1学級あたりの配当額	最多学校規模の2倍以上					学級数が少ないほど少ない(学級数の増加に伴う減少幅は少ない)																	

(3) 考察

学校規模に関する実態調査の結果から、規模によって差異が認められ、課題があると考えられる項目について、その要因を考察しました。

① 教育的視点からの現状

○ 自尊意識

- 小学校で、学級数が多いほど、「自分には良いところがある」と考える児童生徒の割合が高くなる傾向がみられる。
- ・ 学校規模が大きく人数が多いと、それだけ人と関わる機会も多くなることから、自己存在感(周囲から信頼され価値ある存在)や、自己有用感(他者や集団からどれだけ必要とされているか)の自己評価が高まったのではないかと考えられる。

○ 規範意識

- 小学校で、規模の大きい学校ほど、いじめの認知件数が低くなる傾向が見られる。

- ・人数が多ければ、それだけ周りに助けてくれる人も多いことから、いじめにつながるケースが少なかったのではないかと考えられる。
- ・学級数が多いとクラス替えが出来ることから、いじめる側といじめられる側の関係もクラス替えによって解消し、認知件数が低くなったのではないかと考えられる。
- ・学校規模が大きいと職員も多く、多くの目で子どもたちの変化に気づくことが出来るため、いじめにつながるケースが少なかったのではないかと考えられる。

○学校生活

- 小学校で、19 学級以上の学校から、不登校の出現率が増える傾向がみられる。
- ・学校規模が小さいと、教員の目も子ども一人一人に行き届きやすく、声掛けもしやすい。このため、きめ細かな指導によって、例えば、学習についていけずに学校生活を送る気力が小さくなることなども少なくなり、不登校の出現率が低くなったのではないかと考えられる。

○運動への関わり

- 中学校の 27 学級で、休み時間などに外へ出て遊ぶ割合が、特に少なくなっている。
- ・学級数が多く人数が多いと、遊ぶ場所や道具の使用が制限されてしまうため、意識として低くなっているのではないかと考えられる。

②学校運営の視点からの現状

○教材活用

- 小学校で、学級数が増えるほど、パソコン教材の活用（e ライブラリアクセスログ集計〔年間 1 人あたりの教材選択回数〕）が少なくなる傾向が見られた。
- ・各学校には児童生徒用のパソコンが限られているため、人数が多くなれば 1 人が使用できる回数も少なくなり、活用頻度が少なくなるのだと考えられる。

○地域人材の活用

- 小学校で、20 学級程度以上から、保護者や地域人材に授業補助として授業に入ってもらい取り組みが少なくなる傾向が見られた。
- ・学校規模が大きいと、少人数指導などの教職員の配置も多くなり、職員のみで対応ができるため、取り組みが少なくなるのではないかと考えられる。

○学校生活

- 中学校で、学級数が多くなるほど、生徒の意識として、「先生が気軽に話を聞き、相談に乗ってくれる」と感じる割合が増える傾向が見られた。
- ・学校規模が大きいと教職員数も多くなり、担任以外の教員からの声掛けや、相談の機会も増えることから、児童生徒の意識も高い結果になったのではないかと考えられる。
- 小・中学校ともに学校規模が大きくなるに従って、教職員の意識として、子どもと向き合っていると感じる割合は少なくなる傾向があり、中学校では、20 学級以上で、より少なくなる傾向が見られた。
- ・学校規模が大きく職員数が多いと、会議等に割かれる時間も多くなり、子どもたちと接する時間が十分に取れないのではないかと考えられる。
- ・学校規模が小さいと、きめ細かく指導することが出来、子どもと接している感覚も高まるのではないかと考えられる。

○交流活動

- 中学校で、学級数が多くなるに従って、異学年との交流活動が増える傾向が見られた。
 - ・学級数が多いと交流の組み合わせも多くなることから、交流の機会も増えるのではないかと考えられる

○職員の研修等への対応

- 小学校で、規模の大きい学校の方が、教職員の学校外の研修会への参加が多い傾向が見られた。
 - ・学校規模が大きいと教職員数も多くなり、不在となる教員のカバーもし易いため、学校外の研修へも参加し易くなるのではないかと考えられる。
 - ・学校規模が違って、校務分掌の種類は同じであり、小規模な学校は教員1人の役割が多くなることから、研修会へ参加する時間も取れないのではないかと考えられる。

○行事等への対応

- 小学校の11学級以下の学校で、教職員の印象として、学校行事や学年行事を行う上で、「今よりも教職員の数が多いほうが良い」と考える割合がおよそ80%、またはそれ以上となっている。また、24学級以上では、「今より少ないほうが良い」と考える割合が、23学級以下より多くなる傾向が見られる。
 - ・学校規模が小さくなると、行事に関わる子どもたちの役割分担が多くなるため、不都合を感じているのだと考えられる。
 - ・学校規模が大きくなると、子どもたち一人一人の活躍の場が少なくなったり、行事の時間が長くなったり、また、校外学習などでは様々な調整が難しくなったりするため、不都合を感じているのだと考えられる。

《調査の内容について》

調査名	調査の対象	調査年度	実施
○学力学習状況調査 ・児童生徒質問紙	・市立小・中・義務学校の小学校6年生・中学校3年生が質問に回答	27	文部科学省
○学力学習状況調査 ・学校質問紙	・市立小・中・義務学校の小学校6年生・中学校3年生について学校長が質問に回答	27	
○学力学習状況調査 ・教科に関する調査	・市立小・中・義務学校の小学校6年生・中学校3年生が調査の対象	27	
○児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査	・市立小・中・義務学校の全児童生徒が調査の対象	26	教育委員会
○市川市教育振興基本計画の施策の評価に関わる調査 ・児童生徒アンケート	・市立小・中・義務学校の小学校5年生・中学校2年生が質問に回答	27	
○市川市教育振興基本計画の施策の評価に関わる調査 ・保護者アンケート	・市立小・中・義務学校の小学校5年生・中学校2年生の保護者が質問に回答	27	
○市川市教育振興基本計画の施策の評価に関わる調査 ・教職員アンケート	・市立幼稚園・小学校・中学校・義務教育学校・特別支援学校の教職員が質問に回答	27	
○学校評価	・市立幼稚園・小学校・中学校・義務教育学校・特別支援学校の保護者が質問に回答	27	
○新体力テスト	・市立小・中・義務学校の全児童生徒が調査の対象	27	
○ライフスタイル調査	・市立小・中・義務学校の全児童生徒が質問に回答	27	
○現状調査 ・eライブラリアクセスログ集計	・市立小・中・義務学校が調査の対象（学校毎に集計）	26	
○現状調査 ・教職員の配置状況	・市立小・中・義務学校が調査の対象（学校毎に集計）	28	
○現状調査 ・学校予算集計	・市立小・中・義務学校が調査の対象（学校毎に集計）	27	

6 課題の解決策

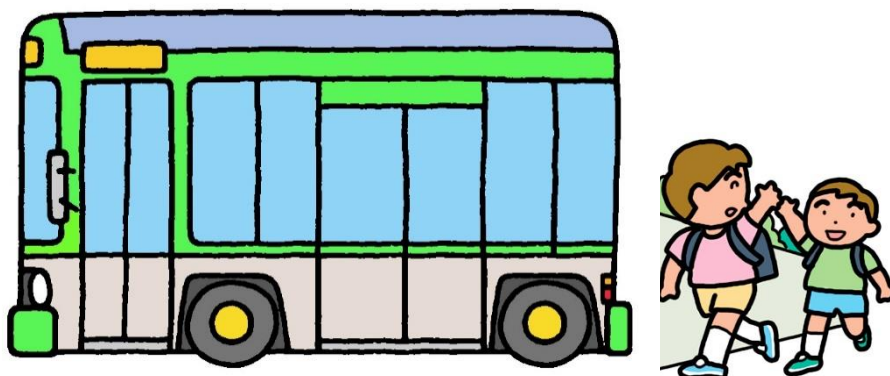
(1) 二俣小学校を移転させることで生じる課題

- ① 通学距離、通学時間、通学方法
- ② 学童保育クラブへの通所、保護者のお迎え

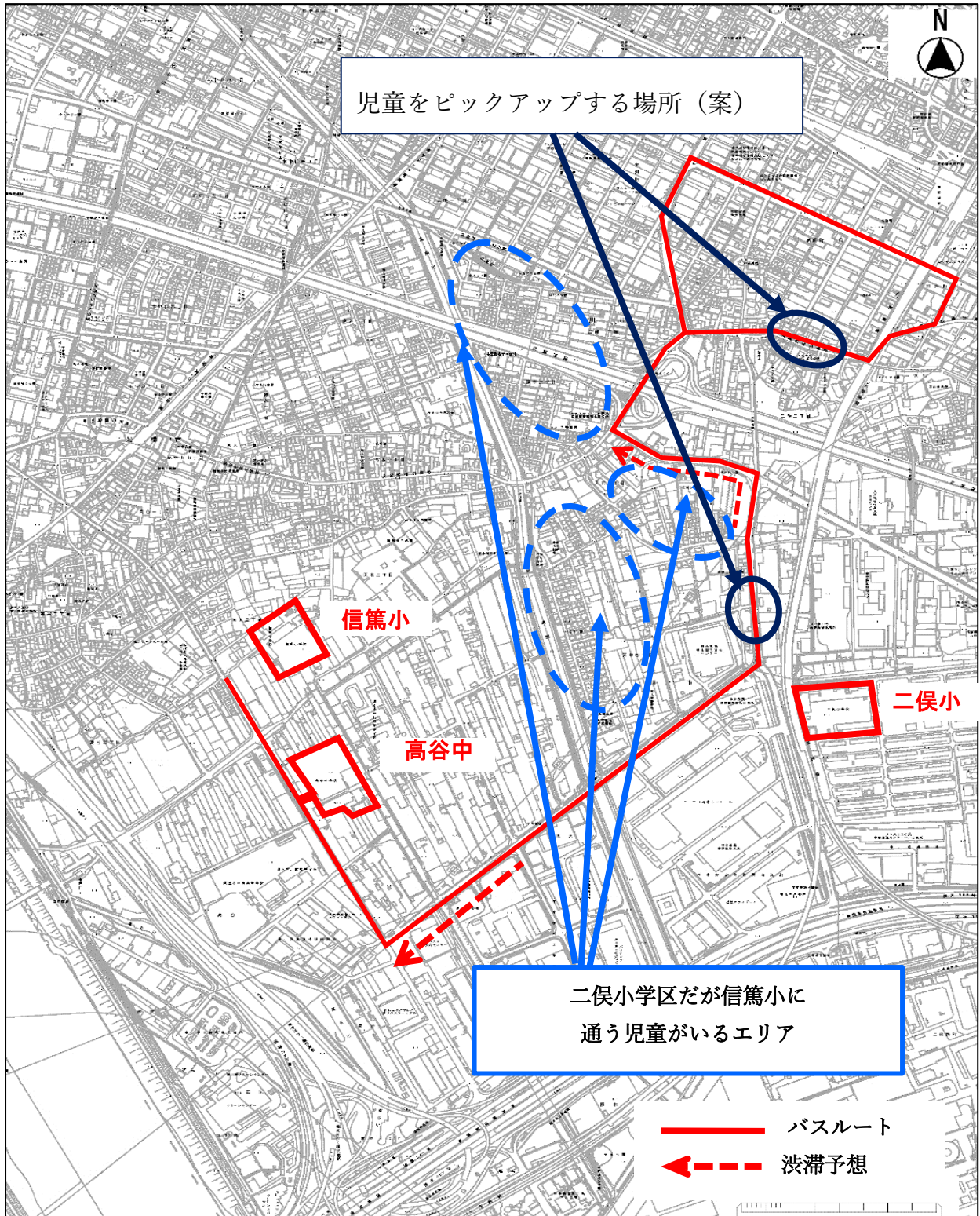
(2) 課題に対する解決策

コミュニティバス（スクールバス）などを検討する

多くの要望を取り入れ、バス会社等と調整していきます。



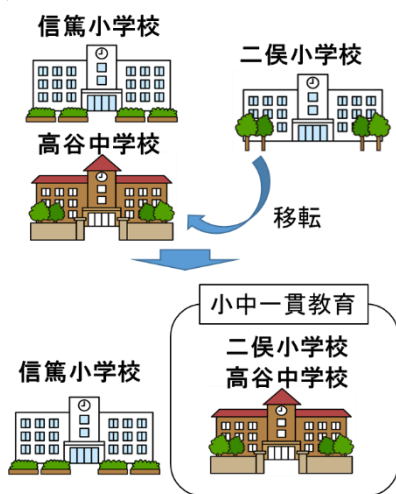
コミュニティバス（スクールバス）の運行イメージ



7 移転後のパターン

各学校施設の移転パターンを検証した。

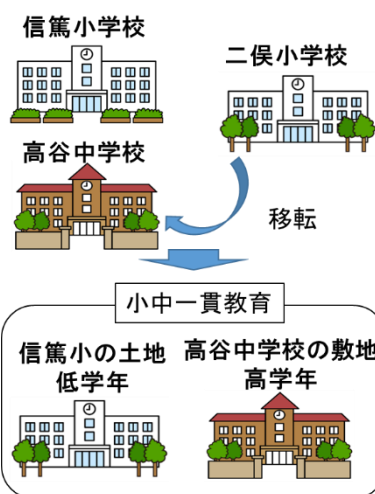
例 1



例 2



例 3



一体型校舎



○検証例

- 例 1. 二俣小学校は高谷中学校に移転し、二俣小学校と高谷中学校で義務教育学校をスタートする。
信篤小学校は単独での運営とする。
- 例 2. 二俣小学校は高谷中学校に移転し、3つの学校で義務教育学校をスタートする
- 例 3. 二俣小学校は高谷中学校に移転し、信篤小学校の土地に低学年、高谷中学校の土地に高学年と中学生が通う義務教育学校をスタートする。

8 新校舎のイメージモデル（塩浜学園の新校舎の例から）

<塩浜学園の内観イメージ図>

① 「内装を木質化」して暖かみのある空間を計画しました。



校舎棟内観パース（木質化）



図書閲覧（読み聞かせ）スペース



屋内運動場棟内観パース（木質化）



校舎棟 2～4 階廊下中央部手洗い



光庭パース

② 学年段階の区切りに対応した施設機能を確保します。

<計画内容>



L 学年学習・展示スペース



S 学年学習・展示スペース



M 学年学習・展示スペース